

令和7年度 第1回 平塚市博物館協議会会議録

■ 開催日時 令和7年5月27日（火） 午後2時～3時30分

■ 開催場所 平塚市博物館 特別研究室

■ 会議出席者（敬称略）

会 長 小倉 俊宏

副会長 藤吉 敬子

委 員 金子 淳、広谷 浩子、山田 美保

事務局 石川社会教育部長、浜野博物館長、川端館長代理（学芸担当長）、坂田館長代理（管理担当長）、早田主管（学芸担当）、濱田主管（管理担当）

■ 傍聴者 1名

■ 会議の概要

1 開 会 社会教育部長挨拶

2 議 事

（1） 報告事項等について

- ・ 令和6年度博物館活動状況について
- ・ 令和6年度春期特別展について
- ・ 博物館こどもフェスタ 2025 について
- ・ 情報発信（ホームページと YouTube・SNS）について

（2） 令和7年度の事業について

- ・ 2025 平塚市博物館 夏のイベントについて

（3） その他

- ・ 事務連絡等

3 閉 会

■ 議事及び質疑

議題（1）報告事項等について

◆令和6年度博物館活動状況について事務局から説明資料により説明。

委 員 プラネタリウムの観覧者数が科学系Vチューバーとのコラボにより2月3月に増えたということだが、講座名は何か。また、追っかけが多いなどの観覧者の傾向があれば教えて欲しい。

事務局 プラネタリウムの一般投影向けプログラムである。観覧者の特徴として、Vチューバーは日本全国や世界中にファンがおり、アンケートを見ると、一番遠くからの観覧者は佐賀県など九州から、他にも四国、仙台市、秋田県など日本全国から来ていた。投影日は週末の土・日曜日と春休み中の水・木曜日で全20数回だが、その半分以上を観覧した人もいたので、人数増につながっていると思う。今までのプラネタリウムプログラムは県内がメインの対象だったが、関

東及び全国から集客することができた。

委員 博物館がアニメツーリズムや聖地巡礼などの対象になり、博物館とポピュラーカルチャーとの結びつきが強くなることはこれから重要になる。ただ一方ではそれに寄りかかり過ぎると両刃の刃になりかねず、全国的な動向を見ると難しいところもあると思うが、知ってもらえきつかけと捉えれば、そういうところと組んだイベントをするのは面白い。また、外部からの講演などの対応は本来業務かもしれないが、学芸員がこれだけたくさんの依頼に対応していることは本当に頭が下がる思いだ。数多く対応している学芸員には、頑張った人が報われるようなインセンティブがあればモチベーションアップにつながると思う。以前話をした科学研究費助成制度の研究費が増えるものや、大学では高校への出張講義や入試の面接などには手当がついたり、本番の入試監督の回数が減ることなどがインセンティブになっている。

◆令和6年度春期特別展について事務局から説明資料により説明。

委員 2階の展示室で、特別展終了後のパネルを展示したポスト特別展が開催されていた。博物館の展示期間に間に合わず残念な思いをすることが多いが、おおよその内容がわかる意味で展示が継続しているのはよい取組みだと思う。ポスト特別展のような、展示終了後のフォローアップというか、ダイジェスト版のような振り返りの展示は、毎回行っているのか。また、特別展で集まってきた物や情報が常設展に反映できる仕組みがあると、常設展もだんだんと充実して多角的になると思う。特別展終了後、その内容を新たに常設展に加えたり、撤去しないで展示し続けると、常設展の充実が図れると思うが、反映できたかを伺いたい。

事務局 ポスト特別展に関しては、一昨年度の秋期特別展「天象儀100年の軌跡」終了後、ダイジェスト版をポスト特別展として2階情報コーナーに、展示中の構成部分を3時期に分けて展示をした。昨年度の秋期特別展「お家を回る子育て地蔵」についてもダイジェスト展示として、2階の情報コーナーで講を中心にした展示を実施した。近年は特別展開催ごとに、ダイジェスト版を展示する形式でポスト特別展を開催している。

事務局 特別展の内容を常設展に反映できたかについては、特別展は始まりが完成ではなく、会期中に未知の情報を得たり、物をいただいたりすることで内容の充実が図られていると認識している。そのことをどのように来館者に伝えられるかについて、常設展は限られたスペースで、館のコンセプトがある中、大幅に更新することは難しいが、効果的だと思うものについては、部分的に反映している。2年前に開催した特別展「神奈川の大地」の際、作製した大掛かりな神奈川県内の地質図を常設展でも見てもらえるように2階の床に貼ったり、歴史分野でも、昨年度開催の春期特別展「ひらつかの古道を行く」では、同様に近世ひらつかの街道地図を2階の常設展の床に貼り付けている。その他、特別展で展示していたものをそれまでの常設展資料と入れ替えて新たに出すなどの取組みをしている。常設展が固定的にならないよう、常設展の一角に特別展のダイジェスト展や特別展の中身を反映させるコーナーを設ける試みもよいと内部で意見があり、次の常設展のコンセプトを考える際の一つのアイディアとしてとらえている。

委 員 今までの特別展も素晴らしく質の高いものだったが、ジェンダーの視点を歴史的に踏まえながら見ることは、今後は重要になっていくと思う。特に今回のような内容が、常設展の中にも散りばめられていくとよりよいと思う。

委 員 子どもにとっては難しい内容だったと思うが、特別展の子どもの入場者数が多いことは凄いと思った。ただ、子どもの感想は少なくて「怖い」というものしかなかったが、他に何か感想が届いていたら聞きたい。人物と出会うことは、小学校も中学校も社会科教育の中で非常に重要なところである。人の営みを通し自分自身が社会に関わっていくことが大事な視点で、この展示は学校教育の中でも十分に活用していけると思った。他に何か感想みたいなものでも届いていたら教えてほしい。

事務局 開催期間中にこどもフェスタがあったことも入館者数が多かった要因だと考える。来館した子どもが皆、特別展を観覧したかどうかはわからない。子どものアンケートは特別展のことではなく、博物館全体の印象などを書くことが多い。特別展について小学生が何か書いたものは残念ながら見受けられなかった。資料に「村井米子さんという方がいること、平塚にゆかりがあると初めて知った。村井さんのマタギの本などが読みたい。～小学生男子」とあるが、親御さんの代筆かもしれない。小学生の生の声を拾えないのは課題だと思っている。

委 員 今回の展示は今の平塚の教育、保育、医療、商業、芸術の礎を築いた先人の中に立派な女性がたくさんいたことを知ることができたという点で、素晴らしいものだった。地元の研究会との共催であったこともまた一つ素晴らしい点である。地元の研究家の方々を大事にした共催という形の特別展は、博物館が新しい展開をしていく中での姿勢、今まで頑張ってきた方々を大切にする姿勢を示すものでもあり、その点でも非常に共感できる、楽しみに思える展示であった。

委 員 記念講演会に多くの人が集まっていたようだが、もう少し詳しく教えて欲しい。

事務局 神奈川県内で女性史研究に長年携わる方の講演だった。県内女性研究団体の横の繋がりで集まった参加者もいたようで、県内女性史研究団体の方や講演者の知人など、このようなテーマということもあり、問題意識を持った参加者が多い印象を受けた。

◆博物館こどもフェスタ 2025 について事務局から説明資料により説明。

委 員 運営には、普段から手伝ってくれる大学生や社会人の他、学芸員をサポートするワーキンググループなどのメンバーはいるのか。

事務局 「お囃子演奏と体験」には、ワーキンググループのお囃子研究会が実演や指導の部分で携わっている。また、「火おこし体験」、「太陽黒点を見よう」、「水ロケットを打ち上げよう」、「古代生活体験」もワーキンググループの会員が運営に従事している。ワーキンググループ会員の協力なしでは実施できないイベントが、半分程度ある。

委 員 名前だけ見ると出ずっぱりの職員がおり大丈夫かなと思ったが、いろいろな団体とコラボしているのはわかった。資料の表に書かれている人数が、サポートに入ってくれた方、協力者ということか。

事務局 そうだ。ろばたばなしは毎月1回古民家の中で昔話を話し聞かせる行事だが、これは学芸員ではなく、ろばたばなしの会の人たち、経験を積んだ一般市民が来館者に話をするものだ。フェスタでも同じ内容で実施している。職員名が担当欄に記載されているが、実際は会場の交通整理や誘導といった役目だ。

委 員 協力者がメインということか。

事務局 そうだ。5月24日にやったプログラムも会員が自分たちでプログラムを考え、30分間、3~4人が順番でお話をする形。全国の昔話を取り上げ、そのうちの一つだけは平塚にちなんだお話をを入れるようお願いしている。

事務局 地域の伝説を再話という形で、平塚市の郷土史家や児童文学者が、断片的な伝説の行間を埋めてわかりやすく作ったストーリーをお話しするのが一つある。

委 員 アンケートの回答数が極端に少なく、運営に反映できるのだろうか。例えばアンケートを書いてくれたら可愛いシールをあげるなど、低年齢層が多いようなのでちょっとした工夫で増やしていけるような感じがする。もう少し母数を増やせたらよい。

事務局 ご指摘のとおりである。アンケートボックスが動線の関係でわかりづらい場所に設置せざるを得ないことや、声をかけてもなかなか応じてもらえなかったことは今回の反省事項の一つである。提案いただいたインセンティブなど、来年度以降、工夫をして対応するよう検討したい。

委 員 アンケートにどこまで求めるのかでやり方も変わってくる。現状は紙に書いてもらう必要があるが、居住地を尋ねる程度であれば、どんぐりを器に入れるとか、シールを貼るとか、その程度のやり方でもいいと思う。スタンプラリーのように、景品をもらうためには書かないといけないとする方法もある。

委 員 子どもたちもスマホを持っているので2次元コードでもよい。

委 員 子どもたちがたくさんいて楽しそうな声が聞こえてきた。職員もバックヤードツアーなど企画・運営することは大変だと思うが、子どもたちが楽しく過ごせるよいイベントなので、来年度も工夫しながら開催をお願いしたい。

◆情報発信（ホームページとYouTube・SNS）について事務局から説明資料により説明。

委 員 YouTubeに関しては、学芸員が個性を全面に出しながら番組の中で、内容紹介することはとてもよいことである。最近、常設展で学芸員個人の専門や研究テーマを紹介する博物館が増えていますが、本市で行わないのはなぜか。

事務局 展示やYouTube、ホームページで学芸員個人を紹介することは特にしていないが、プラネタリウムについては3人の学芸員がいるので、ホームページに似顔絵と名前を出して各々の解説の特徴などを紹介している。

委 員 館を身近に感じてもらうため、こういう人が働いているんだと興味が持てたり、心の距離を近くするという意味でも、学芸員の顔が見えるような何らかの手だてがあるといいと思う。最近いろいろな博物館を廻っている中で、展示の最後に、学芸員の専門と研究内容の紹介や「こう

いう人たちで運営しています」など、博物館そのものを知ってもらうような取組みが展示の中に含まれるケースが多くなってきているように感じる。せっかく YouTube は心の距離を縮めるような取組みにもなっていると思うので、それをもう少し発展させたらどうか。

事務局 やり方はそれぞれの館によるが、公務員の立場としては、仕事は組織としてするもので、個人の顔や名前はあまり前面に出さないようなスタンスが古いやり方だったと思う。他館の例など研究してよい方法があれば、取り入れて検討していきたい。

委員 他館の学芸員紹介では、それぞれの展示担当者から展示の見どころや主張点などを紹介していることが多いと感じる。学芸員の仕事の紹介というよりは、「この展示はこういう人が作りました」という感じで、イラストや顔もあり、学芸員だけでなく、そこに協力したボランティアさんたちも入っていたりする。

議題（２）令和７年度の事業について

◆2025 平塚市博物館 夏のイベントについて事務局から説明資料により説明。

委員 「２名まで申し込み可」とあるのはどういう意味か。

事務局 １つの申し込みに対して２名まで可という意味である。事前申し込みのイベントに関しては、神奈川県電子申請システムを利用しており、この行事では定員の関係から１つの申し込みに対して２名までとしている。

委員 １年分の数と勘違いするくらいイベント数が多く驚いている。夏休みの自由研究相談みたいなことはやるのか。

事務局 夏のイベントは、現時点では歴史と民俗を除いた４分野で行う。自由研究相談はブースを設けないが、問い合わせは集中するので対応している。夏休み中は自由研究の関係で、YouTube のプログラムは多く再生される傾向にある。特に「段ボールで太陽望遠鏡を作ろう」など学芸員がオリジナルの観測機器を工夫しながら制作する番組をシリーズ化した「モノづくりエイター」へ案内することがよくある。歴史分野は今年が戦後 80 年にあたり「平塚の空襲と戦災を記録する会」と開催を検討しているところである。

委員 先ほど顔を前面に出すかどうかの話の中で、プラネタリウムの３人は似顔絵を付けたりして、顔やカラーがよくわかるようにするみたいな話があったが、なぜそういう違いがあるのか。天文は特別扱いというか、学芸員の名前や顔を前面に出して違いがわかるようにするのに、それ以外は行わない。それは、公務員という理屈と違うのではないか。なぜ、その差をつけるのか。

事務局 公務員という理屈で顔を出す、出さないという線引きをするわけではない。天文の３人で話し合い、そのようにした方がお客さんが目当ての投影者の時に見に来る、投影者のファンのようなものがある程度ついているようなので自分たちで売り出して、お客さんの反応も楽しむみたいなのところもあると思う。しかし、皆がそれでよいと考えてるわけでないため、博物館全体でそのやり方を取ろうという流れにはならなかった。似顔絵を出すか出さないかは別にして、博

博物館にはこういう学芸員がいて、こういう研究をやり、博物館や自分の研究に対する思いを語る学芸員の紹介が、ホームページの中であってもよいかもしれない。そこに人物のビジュアルを出す出さないは、本人の希望もあると思うので強制できないが、何らかの形で、それぞれを紹介することは、プラスに働くと思う。意見に出たように親しみやすさを持ってもらうとか、その学芸員の専門性をより知ってもらうことに繋がるかと思う。

事務局 生命の星・地球博物館は、学芸員一人一人の写真があり、研究分野などが紹介されている。イラストも確かに何人かいたかと思う。

委員 写真が嫌という人もいる。

事務局 当館の場合、基本的に学芸員は各分野 1 人しかいないが、天文の学芸員だけは 3 人おり、区別する部分もあると思う。天文の学芸員は基本的に出たがりで、投影に関しても 3 人の個性がそれぞれあり、そのような違いを名前も含めて、識別できるところかと思う。ただ、誰がいつの投影であるかというのは公開しておらず、投影時にならないとわからないということになっている。

委員 大学でもどういう研究者がいるのかというのを前面に出すようになっている。写真は嫌で出したくはないが、業務命令で無理やり写真を撮られ、掲載されるということはある。大学の生き残り策として研究者を前面に出し、この分野を学ぶならうちの大学を受験してくださいというもの。同様に学芸員を前面に出して集客できる仕組みを作れたらよいと思った。

委員 少し期待していきたいと思う。

議題（３）その他

◆事務連絡等

●次回の協議会は令和 7 年 11 月 13 日（木）午後 2 時から開催することにした。